

一、はじめに

隠者文学の代表作「方丈記」の作者として名の高い鴨長明は、賀茂御祖神社の禰宜〔賀茂別雷神社の神主に相当、惣官〕長継の次男。自閉的な性格で妻子とも三十歳台の初めに離別した。詩歌管弦に長じ、歌人としても活躍したが、五十歳のとき、後鳥羽上皇のご内意による撰社河合神社禰宜補任の話も禰宜祐兼に退けられて果たせず、大原に移って出家し法名を連胤と称した。晩年の「方丈記」をはじめ歌論「無名抄」、自己観照の仏教説話「発心集」などの著作に彼の心の葛藤と生き様を読み取ることができる。最近糺の森に「方丈」の模型が長明「ゆかり」の河合神社の側に復元されているのは、神社側の彼に対する昔の冷遇を悔いての八百年を隔てた贖罪の挙と見るのは皮肉であろうか〔方丈は移動に便な組立式で、家の設計に執着した長明が本殿の構造をヒントに考え出したかとされる〕。

ところで、この長明と当時の上賀茂神社とのあいだには少なからぬ接点がある。

二、鴨 長明と神主賀茂重保一歌の交わり

その第一は、当時の上賀茂神主賀茂重保との関係である。重保は長明の三十六歳年長で下社禰宜の長明の父長継の同世代にあたり、おそらく、上、下の違いを超えた交際があったのであろう。長継の遺児に対して支援者かではなかった様子である。

鴨長明には百五首からなる「鴨長明家集」が残っている。実は当時多彩な企画で「賀茂歌壇」を主宰していた賀茂重保の事績の一つに、寿永元(一一八二)年、三十六人の歌人に「百首家集」を勧請して別雷神の神前に奉納した「寿永百首」がある。この長明の家集は後の新古今集などの入選歌を含まず、若年時の作が中心で、恐らく重保のこのときの勧請に応えたものと見られている。当時長明は二十八歳で、このような年で家集を編むことは破格のことであった。

重保はこの寿永百首をもとに、同年秋に私撰集「月詣和歌集」十二巻を編むが、その中に長明家集から四首を採っている。後、藤原俊成の撰になる第八代勅撰集「千載集」に鴨長明の一首が入集したとき、彼は「一首にても入れるはいみじき面目なり」と喜んだという。月詣集は千載集撰集資料の一つとみられており、重保の推挽が役立ったのであろう。

それよりさき、長明は北白川にあった歌人のサロン「歌林苑」の会衆であったが、重保はその財政的なパトロンで会衆の一人でもあった。「新古今和歌集」につぎの題の重保の一首がある。

俊恵法師身まかりて後、年頃遣わしける薪など、弟子どものもとへ遣わすとて

煙絶えて焼く人もなき炭竈のあとのなげきをたれかこるらむ 賀茂重保(1667 巻第十七 雑歌中)
俊恵は、院政期の代表歌人で第五代勅撰集・金葉集の選者源俊頼の子息。歌林苑の主宰者で、重保と親しく、ここにいう弟子とは長明のことかとされている。また月詣集の撰集は俊恵の弟祐盛の助力で成った。

三、鴨長明の名を載せた最古の系図「上賀茂重文系図」

第二は長明の名が実は上賀茂に伝わる重要文化財指定の系図「賀茂禰宜神主系図」の「古系図」の中にあり、これが彼の名を載せた系図として最古のものである。賀茂県主系図(いわゆる古系図)の巻末近く第三部(鴨御祖社系図)、第四部(下鴨祝系図)がそれで、平安時代の禰宜禰主以下鎌倉中期の世代までが記されている。なお、井上光貞氏によると、現在下鴨系図として多くの本が伝わるがそれらはすべてこの上賀茂の古系図を底本としているとされる。

長明の名は兄長守と並んで記されていて彼等がこの系図の最新世代になっている。古系図全体がすべて一つの筆勢で書かれているのでその成立も長明死後あまり時を置かない時期の鎌倉中期(文永年間)と察せられるのである。長明の名の右肩に号「南大夫」と注されていて菊大夫とも伝わる別号も南大夫のほうに分があることが知られる。元来、草書では南と菊は紛らわしい。

四、長明の家名は南大路、後裔の人々

南は長明の家号「南大路」に通じ、大夫は五位の称なので、南大夫とは南大路家の五位の男と云う意味である。長明は七歳で中宮叙爵によって従五位下となったが終生昇叙しないままであった。この南大路家とは鴨県主の家系の一つで下鴨の「泉亭旧図」という記録にも南大路亭、長継、長守これに住むと記されている。方丈記にも「わが身父方の祖母の家を伝えて、久しく彼の所に住む」としていて婿となった父方の祖母の家の名が南大路であったのであろう。

実はこの南大路家は最近まで下鴨社家の家系の一つに残っていた。筆者が別の目的で京都府公文書のなかの明治四年神社御改正寺社調書を閲覧した時、その下鴨社家人別帳に南大路の名があり、当主は長尹・長頭などとあって長の行系字を継いでおられるのを認めた。下鴨の系譜節録にも長明の兄長守十四世の子孫長良の注に「南大路長明」跡絶家再興とあって、兄の子孫が長明の家を再興したことが知られる。

特筆すべきことは、孝明天皇の皇后英照皇太后夙子が南大路家の血統につながるということが分ったことである。皇統の記録に、英照皇太后：九条夙子(きぎ)、山城国愛宕郡下鴨村の南大路家で誕生、父：関白九条尚忠、母：菅山(賀茂神社氏人 南大路長尹の女)とある。

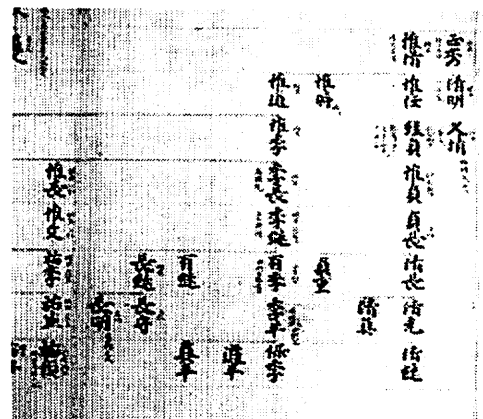
五、うたかたの南大路家

話は変わるが、下鴨西半木町の浄土宗大乘寺の墓地はもと旧下鴨村の墓地で下社の社家の墓碑も多く見られる。当家の墓地の一つもそこにあり展墓の節、近くに南大路の家号の墓碑が見かけられ長頭などという名のももあって漠然と上賀茂の社家のものかと思いついていた。最近ふとその石碑がなくなっているのに気付き管理の人に訊ねたところ、最後の当主の女性「あき」氏の没後無縁となり撤去したと、南大路家は下鴨の社家であることが分り、この墓地が鴨長明縁りのものであることに初めて気付き無念、無常の感を強くしたのである。縁故の方を辿って連絡したところ、態々関連文書や史料を持参して来訪いただいた。それによって、故当主はまさに英照皇太后につながる南大路家最後の末裔であることを確認した。その方は、長明との縁は初耳の様子で今更ながら由緒ある同家の断絶をとともに惜しんだのである。

六、むすびに代えて

ついでながら、千本の上品蓮台寺に江戸時代初期の書博士で賀茂流の書の祖藤木敦直の墓地があるとの記録を頼りに訪ねてみたが探し当てることができなかった。住職夫人も心当たりがないとのこと。同じ記録にある富士谷成章や後藤養庵の墓碑は残っていたが、跡を弔う人の力によってかくも結末が異なるかと悟った。少子高齢化や人の流動化は愈々進むであろうが由緒ある史跡の埋没の事例を目の当たりにして思うこと頻りである。

その人のうたかたのごと跡のなし鴨長明にゆかりの墓碑はや 文雄



在りし日の南大路家墓碑(鈴鹿長雄氏提供)

鴨長明系図(賀茂禰宜神主系図の一部 重文指定,同族会蔵)